

## 平成29年度 第7回（震災後83回）

### 陸前高田市保健医療福祉未来図会議 議事録

テーマ：「 健やかな地域で育つ、健やかな子ども  
～子育ては、つながりづくり～ 」

日 時：平成29年12月15日(金) 13:30～15:30

場 所：陸前高田市役所4号棟第6会議室

参 加： 名 団体

資 料：下記にアップ

<http://healthpromotion.a.la9.jp/saigai/rikuzentakata.html>

- 1 挨拶（陸前高田市民生部子ども子育て課長 千葉 達）  
子ども子育て課では、中学生へのアンケートを実施しているが、回答を見ると、陸前高田の子どもたちが今でも夢をもっていることが分かる。  
希望を持っている子どもが夢を持っている。  
子どものためにもより良い未来のために地域をつくっていききたい。
- 2 内容
  - (1) 未来図会議が目指してきたこと  
陸前高田市被災地絆づくりアドバイザー 岩室紳也
  - (2) 事例紹介 子ども・子育て応援イベント「たかた★こどもフェス」の開催  
～子どもの健やかな成長を願って～  
陸前高田子ども支援ねっとワーク（NPO法人 パクト）  
子ども支援担当 古野安寿子氏
  - (3) 健やかな地域で育つ子ども ～子育て支援で地域づくり～  
NPO法人きらりんきつず 代表 伊藤昌子氏
  - (4) 参加者のみなさまと「はまってけらいん、かだつてけらいん」  
⇒ テーマ：子育てに関する日々の活動やイベントを続けるためにできること

- (1) 未来図会議が目指してきたこと  
（陸前高田市被災地絆づくりアドバイザー岩室紳也）  
はまかだができるれば市は元気になり、幸せになり、子ども達の夢も膨らんでいくが、なかなか理解されにくい。未来図会議は、ヘルスプロモーションの理念に基づいて健康で文化的な生活を目指し、様々な議論をするこ

とを目指してきた。

病気や寝たきりにならないための、健診を受けたか、食べ過ぎ飲み過ぎなどの指導が従来の健康教育に加え、現在、目指す必要があるのは、幸せや生きがい、元気を実現するためにはどうしたらいいのかということである。出来る事は本人がやらなければいけないが、自助だけでなく公助、ネットワークづくりが大事。国も健康づくりのトップに生活の質の向上と社会参加の機会の増加を掲げているが、浸透していない。

健康になるためには地域のつながりの強化が必要。絆には、きずなというつながりを意味する読み方があるが、ほだし（手かせ、足かせ、束縛、迷惑）という読み方もある。ほだしをお互いさまといえる状況に持っていければ信頼が生まれる。信頼、ネットワーク、お互いさまが醸成されたところでは人は健康的な行動をとり、自殺も減り、総死亡率も減る。子育てにもいい影響がある。この後のパクトさんと、きらりんきつずさんの話を参考に考えたい。

## (2) 事例紹介 子ども・子育て応援イベント「たかた★こどもフェス」の開催 ～子どもの健やかな成長を願って～

陸前高田子ども支援ねっとワーク（NPO法人 パクト）

子ども支援担当 古野安寿子氏

パクトは住民やボランティア・関心がある人をつなぐことで復興・地域の活性化を図ることを目的に震災後に立ち上がった団体。子ども支援、ボランティアの受け入れ窓口、旧矢作小学校の簡易宿泊所の運営を行っている。

子ども支援活動では、みちくさルームという子どもの居場所づくりの活動を大学生のボランティアと一緒にしている。

今年度から、みちくさハウスを開始した。みちくさルームの発展形で、毎週水曜日と金曜日の放課後に古民家を拠点に子どもの遊び場居場所づくりを行っている。

子ども支援ネットワーク会議の事務局運営も行っている。市内で活動する子ども支援の団体・機関、関心のある個人が集り、毎月1回の定例会議を行って、情報や地域の課題を共有して互いに協力し合える関係を目指して、2011年から発足した会。震災直後は支援の偏りを解消するためのものだったが、今は何かを一緒にやるための関係づくりの場になっている。会議に参加しない人でもメーリングリストに登録すれば、後日議事録を見ることが出来る。現在、登録者57名、常時5団体参加。

今年度は「孤食」、「孤育て」にアプローチするために、子ども食堂が陸

前高田市でも出来ないかという話が上がった。貧困にポイントを絞るのではなく、地域に受け入れてもらえるようなイベントにしたいという思いから、地域で子ども・子育てを見守る環境づくりに寄与することを目的に、たかた☆こどもフェスを開催した。主催団体を作らず、子ども支援ネットワークの有志による実行委員会で開催した。直接子ども支援をしていない団体も協力してくれた。普段は直接子どもに関わることは何もしていなくても、地元の子供達に何かしたいと思っている人がいるというのは町にとって大切な事。

11月23日に10時から15時までレインボーハウスで開催。あしなが育英会さんも有志で参加してくれた。みんなで食事をする、たかた夢ハウス以外はレインボーハウスを全館開放した。子どもたちが走り回って、カレーをおかわりする子もいる等大盛況だった。

子どもが約100名、スタッフが約30名参加した。内訳は赤ちゃん～未就学児 30%強、小学生 約30%、中高生はターゲットだったが参加なし、保護者等 約30%だった。地域別ではレインボーハウスがある高田町が多いが、広田や横田、市外からも参加があった。地域に関わらず、比較的小さいお子さんと保護者にニーズがあると分析した。

アンケートでは保護者は11名から回答を得て、食に関する内容の回答が目立った。安心して子どもを遊ばせることができ食事つきで半日過ごせるという点が魅力だったと考えている。子どもからは遊びが楽しかったという話が多く、いろんな遊びができたことが満足した点だと分析している。

後日反省をしたが、成果は子どもの少ない陸前高田に100人の親子連れが来たという事、ボランティアベースでできてつながりが強化されて低予算で開催できた事、ターゲットを絞らずに地域に開かれたイベントにしたことで多世代や障がいのある子など様々な人が集まった交流の場が生まれた事である。課題は告知が遅れた事、ターゲットである中高生の参加がなかったこと、孤食・孤立している家庭の人が参加したのか知る方法がない事、祖父母の居場所が必要という事だった。中高生は年齢も上なのでボランティアで来てもらう、必要な子たちという点で言えば地域の状況を知っている機関と一緒に出来る事はないのか、高齢者は昔遊びなら座って見ているだけではなくて教えたりできるのではないかと、課題に対して改善策を考えていきたい。今後に向けて、継続開催するのか、いつ、どのように開催するのか話し合う。今回の開催で、みんな何かしたいと思っていて声をかければ動いてくれるが、キーになる人が必要だと感じた。持続可能にしていくためにどのように地域を巻き込んでいくか、どのようにアプローチしていくのか考えられれば良い活動になるので、アドバイスがあればいい

ただきたい。

質問

今後子どもフェスについて

- ・ イベント規模について、フェスのような大規模開催にするのか子ども食堂のような小規模開催にするのか
- ⇒ 来週、分科会があるので話あう予定。フェス規模で何度も開催するとそれぞれの負担が大きい。各団体が持てるものを持ち寄ってできるだけ負担がかからないようにしたい。地域や団体の状況次第になる。
- ・ 野菜を持っているところは多いので、声をかけると食材が集まるし、食材だけでも参加する人が出てくると思う。
- ⇒ 声をかけると快諾してくれる人が多いので、いかに情報があるか、つながりがあるかが大切になってくる。どれだけ地域を巻き込んで地域のリソースを活かせるかだと実感している。

岩室先生

- ・ 予算はいくらだったのか。各団体の負担は具体的にどのようなもので、どうしたら楽になると感じているか。
- ⇒ 会計がまだなので総額は分からないが、数万円。スタッフはボランティア、食材代はほとんどかかっていない。イベント開催の保険代、チラシの印刷代がかかった程度。各団体の負担はボランティアベースで開催したので、本来の業務や家庭よりもイベントを優先してもらったこと。関わる人を増やすことで各団体の負担を減らしたい。
- ・ 地域を巻き込むという言葉がたびたび出てくるが、地域ということばのイメージはどういうものか。
- ⇒ 巻き込みたいのは子どもに直接かかわらない方。今回のボランティアの方も地域の方ではあるが、普段から子育て支援に関わっている方たちがほとんどだった。今回は食にからめたことで産直、企業等に参加してもらえたが、継続開催する場合、より多くの方に関わってもらいたい。
- ・ 陸前高田市の課題と言うと高齢化がいつも先行している。高齢化問題も大事だが子どもの問題も大事。高齢者だと社会福祉協議会がコミュニティ単位でいろいろとやっている。子育てでもやるのか。どんなニーズがあるのか。支援に頼りきりで良いのか。将来的には地域主体、自分たちでできるという状態に持っていくのがいいのか。
- ⇒ 新聞で告知を見た人が駐車場の誘導くらいならできると声をかけてくれた。子どもや親子に接点はないけれど出来る事があればやりたいと思っている人は多いと気付いたので、潜在的に思っている人をいかに

巻き込むか。

岩室先生

- ・子ども食堂とフェスはまったく違う性質のものだが一緒に開催したことに意義がある。啓発活動は年に1回でも、新聞を見た人は来た人の何倍もいると思うので、1回でも十分意味があり、継続することに意味がある。

### (3) 健やかな地域で育つ子ども ～子育て支援で地域づくり～

NPO法人きらりんきつず 代表 伊藤昌子氏

きらりんきつずは平成22年に開所、平成25年にNPO法人化。3,000人/年、5～6組/日程度の利用がある。子育ての孤立化を防いで子どもたちの笑い声を響かせること、子育て支援を通じて人がつながることを目的にしている。迷惑をかけたりかけられたりする中で、我慢やルールを学んで親子ともに成長していく。話して悩みを解消したり、気づきがある。

イクメンが話題でも母親にかかる負担が大きく、ワンオペ（ワンオペレーション：1人勤務）育児という言葉もある。地域の希薄化が進み、子育ての負担、不安が大きくなる。今の母親は人に迷惑をかけないまじめな人が多いが、お互い様の関係を作っていく事、困りごとがあったら助け合えるというのが大切。子どもは勝手に育つものではない。学校任せ、人任せでは本当に健やかな子どもの成長につながるのか。陸前高田市ははまかだがあり、顔のみえる関係ができていく。皆がつながれば子育てしやすい地域につながる。

少子化だから子育て支援をするのではなく、一人ひとりが居心地のいいノーマなまちを目標にしていきたい。内閣府の2014年のアンケートで、子育てに無関心・つめたいと感じる、子どもを産むと社会から隔離され孤立しているように感じる、相談する相手がいないという回答が非常に高い。

孤立化は子育て家庭に限った事ではない。年代、性別に関係なく人とのつながり必要である。孤立すると体にも心にも影響する。子どもが住みやすい街は誰もが住みやすい街。

親子の広場ではどんな人もひと息ついてほしいと思って活動している。人に優しくされると自分の気持ちにもゆとりが生まれ、相手にも優しくできるようになるという相乗効果が広場の中で生まれている。健やかな地域で育つ子どもは自分も認めることができ、人にも優しい子どもに育つ。子育てしている人も周りもゆとりがないと受け入れられない。受け入れていく力も重要。子育て支援は人づくり、愛でいっぱいの人をつくっていくことが地域づくりにつながる。

質問

岩室先生

- ・人に迷惑をかけたくないという人が増えていて、相談できず、孤立につながる。若者はリアル友達には迷惑をかけたくない。迷惑はお互い様と教えているのがすごいが、その辺はどうか。

⇒子育てしながら自分も成長する。人に迷惑をかけたりかけられたりしながらでないと子育てなどできない。

- ・学校教育では人に迷惑をかけないようにと教えるが、人に迷惑をかけてもお互い様と思える関係を作りなさいと教える必要がある。

千葉課長

- ・相互に依存しあえるというのが非常に大事。依存できる場所を数多く持つことが重要。人と人、親子でも相互に依存できる必要がある。

岩室先生

- ・自立は依存先を増やすこと。依存先が少ないから依存症になる。

#### (4) 参加者のみなさまと「はまってけらいん、かだってけらいん」

グループワーク

テーマ：子育てに関する日々の活動やイベントを続けるためにできること

資料：みんなではまかだ①～⑤参照

- ・イベントについて

⇒関心をもってもらうために、細く長く続ける。やりたい人は潜在的にいるので声をかける。

⇒イベントで人を集めるには口コミが有効。チラシを2～3枚渡して誘って来てもらう。

⇒イベントは普段は入っていない人が入るきっかけとする。

⇒新しい人が入ってきやすい雰囲気大切。もともといた人が新しく来た人を受け入れられるように働きかける。

⇒中高生はお兄さんお姉さんとしてボランティアとして呼ぶ。

⇒多世代交流について、子どもは飽きっぽかったり、周りの子ども達の雰囲気に左右されるので、選択肢が多いことが大切。

⇒小さくてもよいから場所は何カ所かでやると良い。

⇒参加者も自分は迷惑ではないかと感じている可能性がある。その日しか関れない、数時間しか関れない、自分は何もできないと思っている。2人で1人分の関わりをして、つながりを作って、それで十分ではないか。

- ・子ども達が受けているイカノオスシ（行かない、乗らない、大きな声を出す、すぐに逃げる、知らせる）という防犯教育上、声をかけて良いのか悩む。
  - ⇒子ども 110 番の家、隊員などのライセンスがあると良い。
  - ⇒声をかけるのは高田では普通ではないか。
  - ⇒高田は挨拶や声をかけてくれる人が多い。
  - ⇒毎日会うと顔見知りになって安心感が出るのではないか
- ・子育てを自分ごととして考える必要がある。
- ・親としては迷惑をかけたくないが、子どもは迷惑をかけるのがあたりまえだという認識を皆が持つことが必要。
- ・迷惑をかけたくない理由について。
  - ⇒コミュニケーションのとり方がわからない、地域性などの伝統で関わりあっていたものが薄れていったので、どう関わっていけばよいかわからない。
  - ⇒薄れたものの代わりになるものが必要。
- ・地域を巻き込む。
  - ⇒地域の人もどう関わって良いかわからないところがあるので、関心をもってもらうために働きかける。支援に頼り過ぎない。大人が提供するだけでなく子どもが自分達で企画をする。大型のトラックが走ったりしていて、心配で、大人は守る方向に動きがち。大人に与えられた安全・自由の中で過ごしているので、秘密基地を子どもが作って冒険に出られる状態など、大人がずっと見ていなくても遊べる状態が良い。
- ・何かあったらどうするのかと思うと足かせになって何もできないでいる。
- ・矢作と小友を除く地域には父母の会が立ち上げた学童クラブがあり、保育料もかかっている。
- ・子どものころは下矢作に、コミセンを開放して宿題を見たり、昔の遊びをしたり、悪いことをしたら怒られたりする場所があって、世代間交流が出来ていた。
- ・高齢者との世代間交流。3月に社協ときらりんきつずが開催。
- ・わからない事はスマホに頼るのではなく人に聞くとつながりができる。
- ・子どもは地域の未来の活力。未来のイメージに高齢者は入れない。子どもを見れることが大事。
- ・子どもがいると子どもの事だからやらなければならないと思って親同士のつながりができる。面倒くさくて大変だけど後から財産になる。

岩室先生

- ・岩手の幸福に関する指標はつながりを強調している。ほだしには迷惑をかけるという事も含まれている。迷惑をかけない町は不健康なので、次の自殺対策計画にもお互いに迷惑をかけ合う町をスローガンに打ち出してはどうか。

- ◆ 次回（第84回）：平成30年1月19日（金）13：30～15：30  
メインテーマ：生きづらさを乗り越えるために  
～つながり、はまかだ、ノーマライゼーションという言葉の  
いらないまちづくりを考える～  
会場：陸前高田市役所 4号棟3階第6会議室